様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月 14 日現在

機関番号：11501
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：23700690
研究課題名（和文）十八世紀仏語文献における「身体教育」に関する研究

研究課題名（英文）An study on “ physical education” in the French books in 18c.

研究代表者
佐々木　究（SASAKI KYU）
山形大学・地域教育文化学部・講師
研究者番号：30577078

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、18 世紀フランス語文献を対象に、当代における「体育 éducation physique」の意義を、主に文献学的な手続きをとおして明らかにすることにあった。ジャン=ジャック・ルソー、ラ・シャロッテ、クロード・フルーリらの著作が主な対象であり、原著論文などのかたちでまとめられた本研究の成果は、当時の「体育」の含意を明らかにするものである。これによって、「近代体育」の様相が現代のそれと異なるものであることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify (a) mean(s) of ‘physical education(éducation physique)’ in the french books in 18c, mainly in the philological ways. Main objects of study are the works of Jean-Jacques Rousseau, Louis-René de Caradeuc de La chalotais, Claude Fleury. The fruits, succeeded as papers, contribute to clarify means of ‘physical education’ in 18c. And, they suggest that the aspects of ‘physical education’ in this period was different from that of today.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康･スポーツ科学・身体教育学
キーワード：身体運動文化論

１．研究開始当初の背景

これまでの体育学の知見によれば、体育（思想）の歴史は、はるか古代ギリシャ、あるいはそれ以前にまで遡ることができる。哲学者プラトンらの著作や、古代遺跡などに残されている数々の痕跡は、現代の我々に、かつて行われていたであろう体育・スポーツの実践のあり方やそれを支える思想や理念を伝えている。こうした事実に基づくならば、たしかに体育は、人間存在と共に普遍的な営みであるとも言えるかもしれない。しかし、そうであったとしても、体育が各時代・各社会において果たしてきた意義はそれぞれ異なるはずだし、今後直面し解決を求められるだろう課題も必ずしも一様ではないはずである。実際、体育のあり方を巡っては、現代においてもなお繰り返し議論の俎上に載せられており、また、実践の現場でも日々新たな試みと事例が積み重ねられているのである。しかし、どのような形であれ、体育の今後のあり方を考え、新たな実践を積み上げていくためには、これまでの歩みを振り返るこ

とや、とりわけ未知の事実を掘り起こしていくことは常に必要な作業であると思われる。みずからの立ち位置を知ること無しに、真に新しい理念や実践を導くことは難しいことであり、我々が自覚的にしろ無自覚的にしろ依って立つところの理論的・実践的地平が、歴史的にどのように構成されてきたのかを知ることは有意義なことである。

こうした現状において注目されるのが、18世紀西欧において試みられた様々な営みとその成果である。当代は、体育の歴史において、用語の成立や制度的実践の萌芽が認められるなど、他の時代・社会に類を見ないほどダイナミックな展開を見せた時期である。とくに、その当時、仏語によって著された教育に関する作品には体育に関する多くの議論を見いだすことができるのであり、そこで導かれている知見は、その後の体育の展開に大きな影響を及ぼしていることが指摘されているのである。つまり、当代におけるそれらの著作によって確立・蓄積された知的成果は、現代の体育（制度・実践・思想）の思想的な源流とも位置づけることができるのであり、今なお我々の体育観をも深い水準で規定している可能性があるのである。体育の意義やあり方が鋭く問われている現在、当代の仏語文献を改めて自覚的に検証することは、体育に関する我々の理解を相対化し、今後の体育のあり方を追求していくためにきわめて有意義であるだろう。

２．研究の目的

上述のとおり、18世紀は、用語「体育」の成立や、制度的な実践の先駆的試みが見られた、文字どおり画期的な時期であり、いわゆる近代体育（制度）の揺籃期とも言うことができる。本研究において、とりわけ注目したいのは、「体育」という用語の出現に関する、仏語圏の文献のもの（éducation physique）が他の言語圏の用例に先んじているとの指摘である。用語上の観点からすると、体育の歴史の最初の一頁は仏語によって刻まれたということができるのであり、本研究はこうした事実に着目し、いわば理論的な側面から、当代の「体育」の意義を追求しようとするものである。

具体的には、体育との関係が認められる18世紀仏語テクストを対象とし、用語「体育」や、これに関係するいくつかの鍵語に着目して分析を進めていく、という手法を採る。本研究の主な関心は、体育の意義を普遍的な水準で追求することではなく、その意義を個別的水準あるいは特殊時代･社会的な水準で定立することにあり、とりわけ用語の同一性において、歴史上、最古級の「体育」の意義を文献学的な手続きを通して解明していくことにある。

すなわち本研究は、当代における体育の実践的なあり方についてよりも、むしろ、当代において「体育」という用語が担っていたであろう意義について、より大きな関心を寄せるものであり、その目的は、18世紀における体育のあり方をいわば思想的な側面において明らかにすることにある、ということができる。

３．研究の方法

上述のように、本研究では、18世紀仏語文献に注目するものであり、「体育」との関連をすでに指摘されているいくつかのテクストを対象として設定する。研究の一般的な手順としては、第一に、それぞれの著作における「体育」の用例やこれに関係する鍵語を抽出・整理し、著作の論理に即してその意義を明らかにしていくことが挙げられる。ただし、著作によっては未邦訳のものがあり、今後の体育学分野への貢献という点では、それらテクストの邦訳を行い、広く紹介していくことも十分に意義のあることであろう。そこで第二に、未邦訳のテクストについては随時、訳業を進め、これを公刊していくこととする。いずれの手順においても、各作品が著された時代的･思想的背景を考慮し、著者や作品間の相互の影響関係や、社会的な受容の様子などにも目配りすることは必要である。

なお、対象として注目しているテクストを具体的に挙げると、次のものがある。

1) Ballexserd（バレクセール）著
『Dissertation sur L’éducation physique des enfans, dupuis leur naissance jusqu’à l’âge de puberté（子どもの身体教育についての論文：誕生から思春期まで)』, 1762

2) Rousseau（ルソー）著
『Émile, ou de l’éducation（エミール：あるいは教育について)』, 1762

3) La Charotais（ラ・シャロッテ）著
『Essai d’éducation nationale, ou, Plan d’études pour la jeunesse（国民教育論：あるいは青少年のための学習計画)』, 1763

これらの著作はいずれも、すでに体育との関連を指摘されているが、しかし体育学分野ではこれまでのところ十分に理論的な検討が行われていない、という現状がある。

４．研究成果

本研究において、最初に注目したのは、ジャン=ジャック・ルソーの著作『エミール』

である。同作品は、当代を代表する教育論であり、体育に関する言及も一定程度認められている。したがってまた、関連する研究成果も、すでに多くの積み重ねがある。しかし、そうしたこれまでの研究では、概して、ルソー「体育論」を「身体に関する教育」と先験的に規定することから分析が始められており、しかも、論者が予め想定している「体育」を、いわば同語反復的に「導出」するという傾向が認められた。つまり、論理内在的な観点からすれば、ルソーの「体育」は未だ十分に明らかにされていないということができるのである。そこで本研究では、著作に実際に認められるいくつかの用語を対象に設定し、関連する議論を読み解くことによって、内在的な根拠に基づく分析を試みたのである。とりわけ本研究では、「体育」と用語上の同一性を認められる対象、すなわち「フィジーク physique」と「教育 éducation」に着目して分析を行ったのである。

ルソー「教育」論においては、「physique」の用例は、描き出される架空の生徒「エミール」の存在様態との関わりで認めることができる。そこで最初の作業として、これらを網羅的に抽出・整理し、次に、前後の文脈の読解を行うことで、その教育的な意義を「身体 corps」との対比で浮き彫りにしようと試みた。上述のように、これまでの研究において「ルソー体育論」として提示されたのは、「身体に関する教育」についての議論であり、しかも、しばしば論者の体育観がそのまま反復されるという方法論上の不備も露呈していた。これに対し本研究では、著作に実際に認められる用語に立脚することで、そうした不備を回避し、ルソー内在的な論理に基づく実証的な結果を追求した。とくに、「physique に関する教育」論の意義については、「身体に関する教育」のそれと対比させることで、両者の内実の差異を明示することを試みたのである。考察の結果、「physique に関する教育」は、「身体に関する教育」とは同一平面上に解消されない異なる理論的地平に立っており、同時期に成立した「体育」という用語が「身体に関する教育」ではない含意を有している可能性が示唆されたのである。以上の成果は、当代における「体育」の意義を直接的に明らかにするものではないとしても、その理論的な前提条件を追求するものであり、歴史上最初の「体育」が置かれたであろう理論的な地平に対して、初めて自覚的な分析を及ぼすものとなった。

次に注目したのは、ラ・シャロッテの『国民教育論』である。同作品は、「体育」の最古級の用例が指摘される作品であり、その意義を画定することは体育学的に意義深いものと考えられた。同著作については、すでに優れた邦訳もあることから、直ちに分析に取りかかることができるものと思われたのだが、しかし、同著作で認められる「体育」の用例はわずか一箇所のみであり、しかも「記述を切りつめるために」として他の論者の著作を挙げるだけで、みずから関係する議論を展開することはしていないのである。そこで、本研究では、ラ・シャロッテがまさに参照を求めているところの著作である、クロード・フルーリ（Claude Fleury, 1640-1723）の『学問の選択と方法について Traité du choix et de la méthode des études 1686』に着目することとした。上述のように『国民教育論』には最古級の「体育」の用例があり、体育学分野ですでに注目されてきたのだが、この用例が担保する意味の内実は未だ明らかにされておらず、そして上のような事情においては、この意義を画定していくためには、フルーリの著作の読解を先立たせる必要であると考えられたのである。前後の文脈からして、前者の主張は後者の議論に仮託されているものと考えられた。とりわけ、『学問の選択と方法について』は、現在までに邦訳はなされていないという事情もあり、本研究ではその内実の分析の前に、まずは邦訳作業を進め、広く紹介することとした。なお、ラ・シャロッテが当該箇所で参照を求めているのは『学問の選択と方法について』の全部ではなく、「第 20 章」のみであり、本研究では本章の全訳を行い、訳稿は解題を付して学術学会誌に投稿、査読を経て掲載されることになった。

また、「第 20 章」では「体育」の用例を見いだすことができず、したがって本研究課題においてはラ・シャロッテの「体育」の内実を画定するまでには至らなかった。とはいえ、もちろん著作間の主題の同一性において一定の理論的な連関性は認めることができることから、それぞれの論旨を整理･分析していくことによって、やや迂回的な手順であるとしても、将来的にラ・シャロッテの「体育」の内実へと分析を進めていくことは可能であろう。今後の課題としたい。

なお、上で挙げた、バレクセール著『子どもの身体教育についての論文』については、すでに公刊した一部を除くと章単位でもやや大部であり、公表するに至らなかった。

最後に、本研究の直接的な主題ではないが、冒頭に述べたような問題意識から、現代において有力な体育原理論と目されている著作についても、一定の検討を試みた。対象としたのは、佐藤臣彦著『身体教育を哲学する』である。同著作では「体育」の意義が理論的に明らかにされており、その成果は他の著者によってしばしば方法論的に援用されている。すなわち同著作は、現段階における体育原理論の最終的な到達点とも見られるのであって、現代および将来の体育のあり方を追求していこうとする本研究のモティーフか

らして、必ず参照しなければならない対象ということができるのである。とりわけ、将来的なことであるとしても、同著作の論理と主張は、本研究の主旨において得られた結果と理論的に接触していく可能性も想定されるところであった。

今回、具体的に試みたのは、『身体教育を哲学する』の議論について、論理内在的な観点から整理し、その理論的な妥当性を検討することである。同著作において体育概念は、一定の整合性をもって提示されているが、なお、いくつかの点で疑義がある。そこで本研究では、著作の論理を跡づけつつ整理することによって、論理に含まれる問題点を抽出・提起したのである。想定される本研究との接触点にまでは考察は及ばなかったが、今後考察を進めていくためには十分な成果を得られた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
(1)佐々木究、【翻訳】クロード・フルーリ著『学問の選択と方法について』第20章、査読有、第35巻第2号、掲載予定（受理済み）
(2)佐々木究、田井健太郎、「体育原理論」の批判的検討-佐藤臣彦『身体教育を哲学する』に着目して-、体育･スポーツ哲学研究、査読有、第35巻第1号、近日公刊予定
(3)佐々木究、「physique」と教育:ルソー著『エミール』に着目して、体育学研究、査読有、第57巻第2号、2012、pp.399-414
DOI:http://dx.dol.org/10.5432/jjpehss.11109

〔学会発表〕（計１件）
(1)佐々木究、体育原理論のこれまでとこれから-個別研究の批判的検討-(シンポジウム「体育哲学を再考する」)、日本体育･スポーツ哲学会第34回大会、2012年8月19日、大阪大学中之島センター

６．研究組織
(1)研究代表者
佐々木　究　(SASAKI KYU)
山形大学・地域教育文化学部・講師
研究者番号：30577078